
オニナシ

台風X号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オニナシ

【Nコード】

N13010

【作者名】

台風X号

【あらすじ】

カンレキシリーズ第三弾！更に進化したパワーが遂に動き出す！

第一話 封印されている者（前書き）

新たな作品始動へ！

第一話 封印されている者

シラヌイがオートボットのネメシスディセプティコン追放部隊の司令官に任命されてから4ヶ月後、新しいアルファフォースを持つ、戦士がいることが発覚した。

「トランスフォーム！オニナシ！」

オニナシは、自分がアルファフォースであることをまだ知らなかった。

「おい、そのブルドーザー野郎こっちまでおいでだ！」

「舐めやがってトランスフォーム！ブラック！」

ネメシスディセプティコンの一人、ブラックはレーザーガンでオニナシに向かって発砲した。

オニナシは左肩を負傷した。

「くっ、やりやがったな。」

ブラックはもう一回発砲した途端、跳ね返された。

「何だ！シラヌイか！」

シラヌイは、アルファフォースと一緒に覚醒していた。

「何だあの輝きは？」

「君にも、アルファフォースの力があるのは分かるかオニナシ？」

「アルファフォース？」

「自分の意志との合体パワーだ！」

「そんな力が俺に・・・よし！」

オニナシは、アルファフォースを解き放った。

「三代目カンレキの誕生がまじかに迫っているだと！」

第一話 封印されている者（後書き）

次回 第二話 ブラック敗北する。お楽しみに

第二話 ブラック敗北する。(前書き)

オニナシの覚醒が解き放たれる。

第二話 ブラック敗北する。

「三代目カンレキが誕生してしまう。」

オニナシは、意志と合体してパワーアップした。

「オニナシスーパーモード！」

オニナシは、身体を見ていた。

「凄い、これが自らの意志と合体した姿なのか。かつこいいぜ！」

「ちつ、貴様なんか俺を倒すことはできない。」

ブラックは意地になって攻撃を開始した。

しかし、オニナシはそんな攻撃なんて諸共しなかった。

「俺の攻撃を食らえ、アイアンバーストブースト！」

ブラックは、バラバラになって息を引き取った。

「この力はすごいがやり過ぎた……」

オニナシは、シラヌイに注意されていた。

「熱血のアルファフォースは、時として悪に染まる。そのことを気をつける！」

「了解しました。シラヌイ司令官。」

「カンレキの三代目として頑張らないといけない。その責任を
持てば熱血もコンクリートのよう^ばに固まる。」

シラヌイは、初代カンレキの勇気を感じていた。

第二話 ブラック敗北する。(後書き)

次回 第三話 悲しみの惑星 part 1。お楽しみに

第三話 悲しみの惑星 part 1 (前書き)

切なさが強めに書かれています。ネメシスディセプティコンに乗っ取られた星にオニナシが向かう。

第三話 悲しみの惑星 part 1

熱血のアルファフォースを持つ戦士、オニナシは、ネメシスディセプティコンが占領しているといわれる惑星「リークオニカー」に向かった。

「オニナシ、トランスフォーム！」

ロボットモードに変形したオニナシは、惑星の壊滅状態を調べていた。

「これはひどい。惑星の住民の民家が大破しているところまであるとは。」

しかし、オニナシに一人のディセプティコン戦士が近づいていた。

オニナシは、右腕を刀に変形させてその一体のディセプティコン戦士を真つ二つにした。

「危うく不覚を取られるところだったぜ！」

住民の生存確認をし始めたオニナシは、ある物を見つける。

「これはなんだ？もしかしてディセプティコンのエンブレムか？」

オニナシは、戦闘機に変形して辺りを搜索し始めた。

またしても3体の戦闘機に変形するディセプティコンに見つかってしまった。

「くそ、なんで見つかるんだよ。」

三体のディセプティコンは、変形してオニナシを探し始めた。

オニナシは、アルファフォースと合体した。

「こいつのおかげでうまく隠れたぜ！さて攻撃態勢でも取りますか。」

三体のディセプティコンの一人が、オニナシを見つけた。

その時、オニナシの素早い攻撃を受けて、その一人の顔が崩壊した。

「トランスフォーム！アグラスト！」

第十一軍のリーダーが現れた。

「トランスフォーム！サイクロナス！」

更には副リーダーも、そして……

「トランスフォーム！クライドストーム！」

第十一軍は、ネメシスディセプティコンの中でも壊滅的なダメージを受けているがアグラストも問題点の多い人物である。

オニナシは、ネメシスディセプティコン五体を一度に相手にできるのか？

第三話 悲しみの惑星 part 1 (後書き)

次回 第四話 悲しみの惑星 part 2。お楽しみに

第四話 悲しみの惑星 part 2

オニナシは、5体のネメシスディセプティコンに一気に相手にした。

「クライドストーム！早く行け！」

「了解！行くぞテラーコンの馬鹿共！」

テラーコン二体と、クライドストームと一緒にオニナシに襲いかかった。

オニナシは、戦術がかなりの腕前であり、テラーコンやクライドストームをの攻撃を軽々とよけていた。

「こんな攻撃、よければ。」

アグラストは、サイクロナスに言った。

「二手に分かれる！」

「わかった！」

オニナシは、アルファフォースでテラーコン二体をつぶした。

「後は、お前達だな。」

アグラストは、サイクロナスとクライドストームと合体した。

「今の俺を倒すことは、まず不可能。オニナシ、貴様はあの世へ行

ってもらつ。
「

オニナシは、アルファフォースを物体にしようと考えた。

第四話 悲しみの惑星 part 2（後書き）

次回 第五話 悲しみの惑星 part 3。お楽しみに

第五話 悲しみの惑星 part 3 (前書き)

悲しみの惑星三話完結型は、これにて終了です。短めです。

第五話 悲しみの惑星 part 3

オニナシは、アルファフォースを物体にしようと考えた。

「アルファフォースよ！最強かつ素晴らしき力を俺の体に纏い給え。」

オニナシの体が光り始めた。

アグラストフルチャージモードは、攻撃をするのを止めた。

「オニナシスーパーモード！」

アグラストフルチャージモードは、攻撃を再開させ始めた。

オニナシは、避けまくって攻撃をし始めた。

「こいつ、動きが早すぎるぞ。」

「アグラスト、これで最後にしてやる。フォースチップイグニッション！サウンドジャックフルバースト！」

アグラストは、合体を解いた。

「お前が犠牲になれ、クライドストーム！」

「なぜですかーアグラスト様ー！」

クライドストームは、サウンドジャックフルバーストを食らった。

クライドストームは、下半身だけ残った。

「此処は退くぞ！」

「了解！」

第五話 悲しみの惑星 part 3 (後書き)

次回 第六話 惑星の秘密 part 1。お楽しみに

第六話 惑星の秘密 part 1 (前書き)

その惑星のついに明らかになる。

第六話 惑星の秘密 part 1

オニナシは、此の惑星に何かがあると思い、捜査した。

「きつと何かがある筈。」

オニナシは、戦闘機に変形した後、惑星の周りを回った。

しかし、手がかりがなかった。

そこに、一人のトランスフォーマーがいた。

「そこで何をしているんだ？」

「ここで、君を待っていたんだ。」

「名前は？」

「僕の名は、ラトル。オニナシさんですよ。」

「ああ、そうだが？此の惑星の正体はなんなんだ？」

「此の惑星は、ユニクロンです。」

「ユニクロン、この惑星がか。」

「そういうことです。」

「確か、ユニクロンは、ダークエネルギーゴンを持つ者だな。」

「そいつは、
お。」「

第六話 惑星の秘密 part 1（後書き）

次回 第七話 惑星の秘密 part 2。お楽しみに

第七話 惑星の秘密 part 2 (前書き)

あの妙なパチモノトランスフォーマーが登場？誰だか分りますよね。

第七話 惑星の秘密 part 2

「そうですよ。」

ラットルとオニナシは、機能停止中のユニクロンの周りを回った。

異常は見られなかったが、不気味な奴を見つけた。

「何だ、できそこない、カセットレコーダーは？」

「できそこない、言うな。変形開始！」

確かに、できそこない戦士であつた。

オニナシは、ディセプティコンのマークをみて、思わず突っ込んでしまった。

「ディセプティコンエンブレムが捲れているし、エンブレムの絵の感じが草食系になってるー！」

「あつ、本当だ。あれー！ー！」

ラットルは、うっとしいなぞの人物を追い払った。

「行きましょう、オニナシさん。」

「ああ、そうしよう。」

しかし、ユニクロンは、微妙だが右に動いた。

第七話 惑星の秘密 part 2（後書き）

次回 第八話 ネメシスディセプティコンの動き。お楽しみに！オ
ニナシ激誕編から動く敵編になります。

第八話 ネメシスディセプティコンの動き

ネメシスディセプティコンは、会議を行った。

「破壊大帝殿、第十一軍の失態をどう受けどう考えていますのですか？」

「わしの考えでは、第十一軍の失態は、大目に見ることにしている。」

「しかし、デスカイダ様。それでは・・・」

「第五軍リーダー、不満でもあるのかね？」

「いえっ、しかし時には厳しくした方がいいと思いましたので。」

デスカイダは、しばらく考えて第十一軍のリーダーにあることを下した。

「わしは、今まで破壊大帝にない優しさを振舞いすぎていた。これからは優しさを使いながらも厳しくいくことにする。」

デスカイダは、息を吸って第十一軍のリーダーの処罰を下した。

「第十一軍リーダー、お前はしばらく第八軍の組織のメンバーとしてもらう。その代わりにデッドオアアライブが第十一軍リーダーをしてくれ。」

「了解しました。デスカイダ様。」

「アグラスト、異動処分程度で済むのは、わしが破壊大帝の座を持っているからだ。目がトロンのような破壊大帝だったら処刑されているぞ。そこはありがたく思っていたまえ。」

「まことに失態の件、申し訳ございませんでした。」

アグラストは、デスカイダの裏で裏切りをたくらんでいた。

第八話 ネメシステイセブティコンの動き（後書き）

次回 第九話 愛のない将軍。 お楽しみに！

第九話 愛のない將軍

第二軍のリーダー、メガトラヴは、オニナシ対策をとっていた。

「クズを倒すには、貴様等の力が必要になる。すぐに行け！」

「そんな、早すぎませんか？」

「んだと、俺にその口をきく奴は殺す。殺里行きやがれ！」

「了解！」

メガトラヴは、さびしい奴である。

一方、オニナシとラットルは、メガトラヴの作りだした産物を味わっていた。

「ラットル、君はそっちを。」

「了解、オニナシ殿。」

オニナシは拳で攻撃をして、ラットルは剣で攻撃した。

しばらくして、オニナシ達はテラーコン集団を倒していた。

メガトラヴは、残っているテラーコンと合体した。

第九話 愛のない將軍（後書き）

次回 第十話 オニナシ大苦戦！。お楽しみに！

第十話 オニナシ大苦戦

ラットルとオニナシは、テラーコン達を殲滅していった。

「俺の拳を食らえ！」

爆発音とともに戦闘機に変形して、ミサイルで止めを刺すという傲慢な行動はオニナシ特有のものである。

「ラットル、俺に乗って強行突破だ。」

「分かったぜ！」

その時、メガトラヴが、たくさんのテラーコンを連れ込んで現れた。

「お前に目のいいものをあげよう。テラーコンども合体だ！」

「うぎややややややや！」

オニナシとラットルは、メガトラヴの巨大化を見て啞然としていた。

「こいつ。めちゃくちゃでかくなりやがった。」

メガトラヴの今の大きさは全長500mである。

実際の大きさは5mなので、100倍に大きくなった。

オニナシ達は、作戦を立てるも巨大な姿をしたメガトラヴの攻撃に身動きが取れなかった。

「どうしますか。」

「スーパーモードでもかなわない。」

第十話 オニナシ大苦戦（後書き）

次回 第十一話 ハイパーモード発動！最強の強さ。お楽しみに！

第十一話 ハイパーモード発動！最強の強さ

スーパーモードでもかなわないことを確認したオニナシ。

「ハイスピードアタック！」

オニナシの攻撃が弾かれた。

「今度は、こっちの番だ。スタンダスデストロイヤー！」

オニナシとラットルは、ミサイルの弾幕を避けるのに一苦労していた。

「こいつ、うわあああ！」

「オニナシ殿、ギャー！」

「ハハハハ、これは弱くて話にもならない。」

オニナシとラットルは、手をつないで力を共感しあっていた。

「何だ、あの光は？」

「オニナシ、ラットル！リンクアップ！オニナシハイパーモード！」

オニナシは、右手から剣型の銃を取り出した。

「くたばれ！オニナシハイパーモード！」

「ふんっ、サテライトビームフルスロットル！」

「なにっ！」

メガトラヴは、大爆発して消滅した。

第二軍全滅

「破壊大帝殿、このままでは・・・」

「第三軍で試してみたまえ。」

「そうですね。」

（オニナシ、新たなアルファフォースの使い手。これは面白くなってきたぞ。）

デスカイダはにやりとしていた。

第十一話 ハイパーモード発動！最強の強さ（後書き）

次回 第十二話 オニナシ、天然な作戦。お楽しみに！
いったいどんな作戦かは楽しみにしましょう。

第十二話 オニナシ、天然な作戦

オニナシとラットルは、サイバトロン星第6基地本部で休んでいた。第6基地本部司令官ロッドマスは、ネメシスディセプティコンのデータを持ち歩いて、オニナシ達に見せた。

「こちらが、今までの被害件数と目撃証言です。」

「オニナシ殿、どうもある場所に集まっていますよね。」

「確かに、此処は確か昔のディセプティコン軍の基地があったという場所ですよ。」

「はい、そうです。四百五十万年前に基地になっていました。」

「今は、市民が住む町になっているのか。」

オニナシは、何やら作戦を立てていた。

「市民に化けよう。そしてディセプティコンを待ち伏せする。」

ラットルにとっては、天然な作戦のように思えた。

第十二話 オニナシ、天然な作戦（後書き）

次回 第十三話 第三軍の侵攻を目撃せよ。お楽しみに

第十三話 第三軍の侵攻を目撃せよ

市民に化けているオニナシとラットルは、緊張していたがそれを市民の警戒心として変えていた。

「本当にこれで行けるのですかね。」

「大丈夫だ。ディセプティコンの行動を見かければ重要な手がかりになる。」

強気な姿勢を崩さないオニナシ。

そこにディセプティコンの連中がやってきた。

「第三軍の連中だな。」

ラットルはオニナシの指示通りにあるものを用意した。

「準備OKです。オニナシ殿。」

「合図するまでは待機してくれ。」

「了解！」

オニナシがしばらくしていいタイミングになったと合図をした。

「よしっ！とりゃー！」

巨大な檻が突如ディセプティコン達の頭上に落ちてきた。

「閉じ込められたー！」

「オニナシ貴様！」

「悪いね。でも何を探っているのか気になってるんだそれを話すまでは檻からは出さない！」

「そういうこと。」

「あれは、オニナシの相棒、ラットルじゃないか。」

「こいつ等を相手にしてはまずい。話した方がいいんじゃないか。」

「そうだな。」

オニナシとラットルは、彼らの話を聞いて納得はしたが嫌な予感がしていた。

「ダークエネルギーゴン、どこかで聞いた覚えがある。」

オニナシは、のど元から出そうな答えがなかなか出なくて困っていた。

「オニナシ殿、ディセプティゴンの企みはダークエネルギーゴンを集めることというのは何か気がかりです。」

「確かに。裏がある。ユニクロンを崇拜していそうな気がしている。」

第十三話 第三軍の侵攻を目撃せよ（後書き）

次回 第十四話 ブラッドクリームとレインバレルの襲撃。お楽しみに！

第十四話 ブラッドクリームとレインバレルの襲撃

オニナシ達は作戦を立てていた。

「オニナシ殿、あのディセプティコンはどうするつもりですか？」

「次にやってくるディセプティコンたちに見せてやろう。」

「いいアイデアですねオニナシ殿。」

ビクトリーポーズを互いに取り合った2人。

一方、牢屋に閉じ込めているディセプティコンは・・・

「どうするんだよ。レインバレルの野郎に見られたら笑い者だぜ俺達。」

「そうだが、これでは死ぬしかないな。」

「だったら、かなえてやろうか。」

レインバレルとブラッドクリームがやってきた。

「レインバレル殿、助けてください。何でもしますから。」

「ブラッドクリーム、頼むよ。」

「うるさい！レインバレル殿処刑の準備を。」

「ふむ、分かっておる！」

レインバレルの右腕が剣に変形した。

「クライムトライデントソウル！」

巨大な閃光が、牢屋ごと跡形もなく消し飛ばし周辺に地震が発生した。

「ついに来たか。」

「行きましようオニナシ殿。」

「ああ！」

第十四話 ブラッドクリームとレインバレルの襲撃（後書き）

次回 第十五話 ハイパーモード再び、加熱の魂。お楽しみに！

第十五話 ハイパーモード再び、加熱の魂

オニナシとラットルが外を出て見た光景は恐ろしいものであった。

「なんだこれは・・・」

「跡形も無く消されている。」

「来たかオートボットでアルファフォースの力を持つ者、オニナシ！と相棒のラットル。」

レインバレルとブラッドクリームがオニナシを見下ろしていた。

「貴様らか。ディセプティコンを一掃したのは！」

「ああそうだ。用無しには死あるだけだからな。」

「酷すぎますよオニナシ殿。」

「もちろんだ。そうやって捨て駒にすること絶対に許さない。」

「ほざけっ！貴様等も死ぬのだ此処で。」

「クライムトライデントソウル！」

オニナシとラットルは攻撃を避けて合体した。

「オニナシハイパーモード！」

レインバレルとブラッドクリームが殴りかかったところを熱血のア
ルフアフォースで止めた。

「やれやれ、これで止めても分からぬのか。」

「何を！」

「ファイアースペリオルキャノン！」

ブラッドクリームとレインバレルは500mまで吹き飛ばされた。

第十五話 ハイパーモード再び、加熱の魂（後書き）

次回第十六話第三軍のリーダーの名が明かされる時。お楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1301o/>

オニナシ

2011年11月26日18時58分発行